

ひょうご NIE 通信

—2025 神戸大会へ—

発行 神戸新聞社 NIE 神戸大会事務局 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7
☎078-362-7003 メール hyogo-nie@kobe-np.co.jp



Newspaper in Education

教育に新聞を

記憶と教訓をつなぐ

阪神・淡路大震災 30 年、神戸大会で実践発表

1995年1月17日午前5時46分、神戸で震度7-。6434人が犠牲になった阪神・淡路大震災から30年になる。列島はその後、東日本大震災(2011年)、熊本地震(16年)、昨年の元日には能登半島地震と大きな地震に見舞われ、南海トラフ巨大地震への備えは待ったなしだ。

年が明けた。「第30回NIE全国大会神戸大会」(7月31日、8月1日)が7カ月後に迫ってきた。大会は「いのちを守るNIE」を柱の一つとし、兵庫でNIE活動に取り組む学校が、「防災・減災」をテーマにいくつかの実践発表やポスター発表を行う。

実践発表校の一つ、県立須磨友が丘高校(神戸市須磨区)の生徒たちは、神戸市立横尾小学校や同市立多井畑小学校など近隣校で防災授業を続けてきた。昨年2月、横尾小で行われた授業では、阪神・淡路大震災と能登半島地震を報じた新聞記事を教材に、高校生と小



須磨友が丘高校の生徒が出題する防災クイズに答える児童=2024年11月29日、神戸市立多井畑小学校

学生が避難所の生活について考えた。今年2月の授業では、南海トラフ巨大地震のことにも触れる。

30年前、神戸で取材した者として強く思う。「阪神・淡路の記憶と教訓のバトン」を児童生徒につなぎたい。震災を知らない世代こそ、震災を語るべきだ」

実践発表校の一つ、県立網干高校(姫路市網干区)は、地域の防災資源を活用した「防災ツーリズム」に取り組む。

2月12日には同校の生徒も参加して、姫路市立網干西小学校(姫路市網干区)で「私たちの防災」をテーマにした公開授業がある=兵庫県NIE推進協議会ホームページ参照。関心のある方は、ぜひご参加を。

神戸市立白川小学校(神戸市須磨区)は、神戸新聞朝刊に連載中の企画「震災ダイアリー」を読み、防災学習に役立てる活動を続けている。震災ダイアリーは阪神・淡路大震災後の日々を撮影した写真が毎日掲載され、児童たちが感想を発表し合うなどしている。学びの成果を神戸大会でポスター発表する。

ポスター発表では、河北新報社(仙台市)のプロジェクトで、東日本大震災の被災地の中学生が復興の現場取材した「震災伝承新聞」も紹介される予定だ。

(神戸新聞社 NIE・NIB 推進部シニアアドバイザー、兵庫県 NIE 推進協議会 事務局長 三好正文)

「第30回NIE全国大会神戸大会」(7月31日、8月1日)初日の記念講演に、西宮市在住の芥川賞作家小川洋子さん=写真=が登壇する。小川さんはベストセラー「博士の愛した数式」などの作品で知られ、海外でも評価が高い。独自の小説世界を次々と生み出してきた作家が何を語るのか、期待が高まる。

新聞に「人間や社会の不思議」

神戸大会記念講演に作家小川洋子さん



記念講演の講師は、第1回大会が作家井上ひさしさん。2001年夏、神戸で開かれた第6回大会は昭和を代表する作詞家阿久悠さんだった。淡路島で生まれ育ち、「勝手にしやがれ」「UFO」など5千曲以上を手がけた。第29回大会まで、著名人が並ぶ。

小川さんは1962年岡山市で生まれた。早稲田大卒。91年に「妊娠カレンダー」で芥川賞、芦屋が舞台の「ミーナの行進」で谷崎潤一郎賞、「ことり」で芸術選奨文部科学大臣賞など、多くの賞を受けた。芥川賞の選考委員を務める。2002年から阪神間に住み、大の阪神タイガースファンで甲子園球場にも足を運んでいる。

大会までに、日本新聞協会のNIE実践指定校の西宮市立浜脇中学校で授業を見学する予定。新聞を毎日読むという小川さんは「新聞は、どんな苦しみを与られてもどうにか生きている人がいると教えてくれる。小さな数行に、ものすごい人間の魅力を感じる記事もある。人間や社会の不思議を感じさせてくれる」と語る。

(神戸新聞社 NIE 神戸大会事務局 網 麻子)

神戸新聞 2024年12月27日 金曜日 面名 教育 1 13 17ページ

なおみ先生の NIE教室



高校で国語を教えていたとき、テストで「覆水盆に返らず」の意味を問うと、「おぼれて死んだ人はお盆に帰ってこない」と書いた生徒がいて、見どころのある誤答だと感心しました。「七転び八起き」は正解だけど、起きるの1回多くないか? 「名誉挽回」の誤答「汚名挽回」って、汚名を取り戻してどうする、などと思いつつ採点していました。

英単語を知らないと英文が読めないように、言葉を知らないと文章読解ができないので、国語では、語句に関する問いをよく出題

⑤

新聞活用で一石二鳥

します。しかし、最近は読書離れや、交流サイト(SNS)、インターネットの多用などで、語彙力低下が懸念されています。

言葉の力をつけるには、新聞活用が有効です。記事にはことわざや四字熟語の他、小論文に出そうな「エシカル(倫理的)」「レジリエンス(復元力)」などのカタカナ語が載っています。生徒たちが新聞からキーワードをピックアップし、語句の問題を作成するのはいかがでしょう。

例えば「女性議員は一朝一夕には増えない」「配属ガチャ」などについて、意味を問うたり空欄補充したり。朝のホームルームで、タ

ブレット上に生徒作成の問題を配布し、その場で解答、採点すると、時間をかけず、問題を作る生徒も解答する生徒も言葉の力をつけることができます。その上、問題作成の際、記事を読みますから社会への関心も高まります。一石二鳥。一挙両得。

(NIE・NIB推進部顧問 吉田尚美)

◆NIEは学校で新聞を教材として活用する活動です。この連載は第4金曜に掲載。

よしだ・なおみ 兵庫県稲美町出身。県内公立高校国語教諭、三木北高校長、播磨南高校長などを経て現職。

生徒が問題作成、社会への関心も

2024年12月27日付神戸新聞朝刊教育面に掲載されました